

谷崎潤一郎

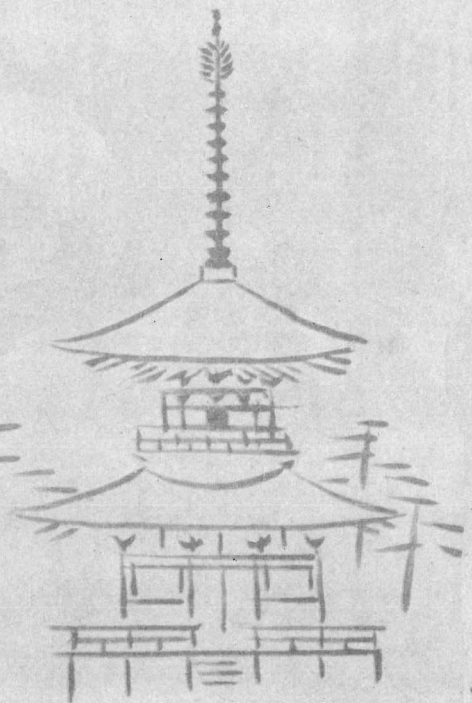
新説 源氏物語 卷二



谷崎潤一郎

新・源氏物語 卷二

中央公論社



新々訳源氏物語卷二奥付

昭和四十年一月十一日印刷 昭和四十年一月二十日発行

訳者谷崎潤一郎 発行者宮本信太郎 印刷者高橋武夫

発行所中央公論社東京都中央区京橋二丁目一番地



定価四八〇円

卷二目次

未摘花	三
紅葉賀	三九
花宴	七
葵	全
賢木	一七
花散里	一九

末摘花

末摘花すえつむはな

どう思つてみてもやはりいまだに心残こころがみりな夕顔ゆがなの、露に先立たれたあの折のお氣持を、年月を経てもお忘れになりません。ここでもかしこでも、へんに様子ぶつた方々ばかりが、お互いに警戒し合い、競争し合つていらつしやるのを御覧になりましては、あのなつかしく親しみやすかつた面影おもかげの類たぐひなさを、今も恋しくお思ひになります。どうかして、重々しい身分の者でない、世にも可愛らしい人柄の、氣兼ねのいらぬようなのを見つきたいものと、性懲りしやうちやうもなく思いつづけていらつしゃいますので、少しでもすぐれているような評判のあるあたりのことは、漏れなく聞き込んでおいでなされて、ひよつとしたらとお思ひになる素振りのあるようなのは、一筆二筆ほのめかしてごらんになるらしいのですが、そのお言葉に靡なかないで逃げてしまうようなのは、まずもつてありそうにないというのも、さりとて曲がなさ過ぎることです。そうかといって、無愛想で氣の強い

は、たとえようもなく生真面目で、暖か味がなかったりして、あまり身のほどを弁えないようですけれども、それも結局、そういう態度で通しきれず、しまいにはすっかり意気地がなくなつて、平凡な所へ縁づきなどしますので、ついそのまままで止めておしまひになる場合も多いのです。あのいまましい空蟬のことを、何かのおりおりには思い出されます。また萩の葉へも、いい風の便りのある時には、おとずれておやりになることもあるでしょう。いつぞや燈火のかげに碁を囲んでいたしどけない姿を、あのままもう一度見てみたいともお思ひになります。いったいに、過ぎ去つた女を跡形もなく忘れ果てるということがおできにならないたちなのでした。

左衛門の乳母といつて、大貳の尼君に次いで大切に思つていらした者の娘が、大輔の命婦と呼ばれて内裏へ御奉公に上つています。これは皇族のおん血筋の兵部大輔である人の娘でした。たいそう色好みな若女房なのでしたが、君もときどきお召しになつて、御用を仰せつけなどしていらつしゃいました。母なる人が今は筑前守の妻になつて、任国へ下りましたので、父君の家を里方にして御所へ通つています。故常陸の親王が晩年に儲けて一方ならず御寵愛なされたおん娘の、そのうち親王に先立たれて心細そうに暮していらつしやる御様子、何かの折にお話し申し上げますと、お気の毒なことだと仰せになつて、いろいろとお尋ねになります。「心ばえ、御器量など、立ち入つたことは存じません。いつもひっそりとしていらして、どなたともあまりお会いなさいません

い、。「空蟬」八三頁

から八四頁に見える
若い方の女のこと。

「夕顔」一四一頁で
源氏がこの女へ「雁

のかにも軒端の萩を
むすばずば」という

歌をおくつてゐる
へ、「夕顔」の冒頭に

見える女

ニ、今日北窓下。自問
何所^い爲。欣然得^え三
友。三友者爲誰。琴
罷^や。舉^あ酒。酒罷^や
吟^い詩。三友通相引。
循環無^な已時。「白氏
文集」

ので、どうかした宵などに、几帳を隔ててお相手をいたします。琴を一番仲のいい友達にしていらいっしやいます」と申しあげますと、「琴と詩と酒とは北窓の三友である、白楽天が言っているが、最後の一つは女には向かないね」と仰せられて、「その琴の音を、私に聞かしておくれ。父宮はそういう方面のお嗜みが深かったのだから、普通のお手並みではあるまいと思う」と仰せになります。「わざわざお聞きになるほどではございますまい」と申し上げますと、「ひどくもったいをつけるではないか。この頃の朧月夜に忍んで行こう。そなたも退つて来るように」と仰せになりますので、面倒だとは思ひながら、つれづれの春の一日、御所のうちのものんびりとしている折に退出します。

父の大輔の君は別の所に住んでいまして、常陸宮の御殿へは、ときどき通うだけなでした。命婦は継母と暮すのを嫌つて父のもとには住み着かず、姫君のおんあたりに親しんで、始終こちらへ伺うのでした。と、かねておっしゃっていらした通り、十六夜の月のおもしろい頃に君はお越しになりました。「物の音色の冴えそうな宵でもございせんのは、えらいお気の毒なことで」と申し上げるのですが、「まあ、あちらへ行つて、ほんの一声でもお弾きになるようにおすすめておくれ、空しく帰るのは残念だから」と仰せになりますので、氣遣わしくももったいなくも思いながら、とりあえず自分の局のうちへそうとお隠し申しておいて、寢殿の方へ行つてみますと、まだ姫君は格子なども上げたまま、梅の薫りの匂う庭先を眺めていらっしやいます。いい折だなと思

イ、伯牙善鼓琴。鍾子期善聽。(中略)子期死。伯牙絶絃。以無知音者。〔列子〕

って、「かような宵にはお琴の音色がどんなに立ち勝って聞えましょうかと存じまして、浮かれて参ったのでございます。日頃は氣忙しくしておりまして、聞かせていただけませんのが、口惜しゅうございます」と言いますと、「あなたのような音を聞き知る人がここにありますのに。畏きあたりに入入りをする人に、とてもお聞かせするほどのものでは」と言いつつ楽器をお取り寄せになりまして、どのような心持でお聞きになるやらと、わけもなく胸をわくわくさせます。やがてほのかに掻き鳴らされる爪音が、風情ありげにきこえて来ます。特に上手というほどのこともありません。けれども、もともと音色の格別なものですから、君もそんなに聞きにくくは感じになりません。たいそう荒れ果てた寂しい場所に、かつてはお立派な父君がおいでなされて、この姫君を昔風に、重々しく守り立てていらしたのであるに、今はその頃の名残りもとどめず、どんなに苦勞のかずかずを味わい尽くしておいでであらう、昔の物語でも、こういう所にこそあわれな事件が生れるものだ、などと考えつづけて、ものを言い寄ってみようかともお思いになるのですが、無縁のように思われるのも氣恥かしくて、ためらっておいでになります。命婦は氣の利いた女なので、あまり長くお聞かせ申さない方がいいと思つて、「空が曇つて参つたようでございますね。わたくし、客人が参るはでございしますが、わざと留守にいたしましたように見えますのめいかがでございます。またゆるゆると聞かせていただきます。御格子をお下し申しましょう」と、よいほどに切り上げて出

て来ますと、「惜しいところで止めたものだね。あれでは驚と聞き分ける暇もなく残念な」と仰せになる御様子は、それでも感興をお覚えになったのでしょうか。「同じことなら、もそつと近くで立ち聞きさせておくれ」とおっしゃるのですが、奥ゆかしい程度で止めておきたいので、「じやと申して、あるかなきかの有様で、みすばらしい暮しをなさりながら、消え入るようにならっしゃるのでございますから、気が咎めまして」と言いますので、なるほどそれもそうであらう、お互いに見も知らぬ者が、急に睦じい仲になって心を通わすようなことは、身分の低い者の間ですることだからなどと思ひになりながら、なおその人のお身の上を可哀そうにお感じなされて、「でもまあ私の心持をそれとなくお伝えしておくれ」と仰せになります。どこぞにお約束なすつた所でもあるのでしょうか、たいそう忍んでお帰りになります。「お上があなた様のことを真面目過ぎると思ひ召して、お案じ遊ばしていらっしゃいますのが、折々おかしくてならないことがございます。かようなお忍び歩きのお姿を、よもや御存じではいらっしゃいますまい」と申し上げますと、笑いながら戻っていらして、「そなたまでがほかの人のように、あら捜しをするものではないぞ。これくらいなことを浮気な振舞いだと言うなら、女の人の身持ちなどは何と言つたらいいのだ」と仰せになるのでしたが、君は命婦をえらい好者のように思われて、よくこんな風におっしゃいますので、命婦は恥かしくて、ものも言いません。

イ、竹などを結んで、
向うが透いて見える
ように造った垣

寢殿の方へ行ったら様子をさぐるたよりもあろうかと、そうつとそちらへお立ち出でになります。
透垣の崩れたのがただ少し残っている蔭のところに立ち寄ろうとなさいますと、前からそこに佇んで
いる男がありました。誰であろう、この姫君に懸想している好者がいたのだなどお思いなされて、
蔭に寄り添ってお隠れになりますと、こちらは頭中将なのです。この夕がた、内裏から御一緒に
退出なされた時、そのまま君が大殿へも寄らず、二条院へも帰らずに別れておしまになったの
を、どこへお越しになるのかしらんと訝しがって、自分にも行く先がありましたのに、わざわざあ
とを尾けて来たのです。怪しげな馬に乗って、狩衣姿の無造作な身なりで来ましたので、君もお
気づきにならなかったのですけれども、さすがに、見当違いな家の方へおはいりになったのを心得
がたく思っていますうちに、琴の音が漏れて来ましたので、つい聞き惚れて佇みながら、もうじき
お立ち帰りになるでもあろうかと、心待ちにしているのです。君の方ではまだ何者ともお分りに
ならず、それより自分であることを知られないようにと、抜き足で立ち退こうとなさいますと、つ
と寄って来て、「人をはぐらかしておしまになった憎らしさに、お送り申して参ったのです。

もろともに大内山は出でつれど

いるかた見せぬいさよひの月」

ロ、御一緒に宮中を退
出しながら、あなた
はどこへいらした
のか、行く先をくら
ましておしまいな

と、嫌味を言うのも頼なのですでしたが、何だ、中将だったのかとお分りになりますと、少しおかしく

りました。「いさよひの月」は源氏のこ

と、源氏の歌。どこの

里といつて分け隔てをせず、あまねく照らす月影をこそ眺めもするだろうが、その月のはいる山の端までも詮索する者があるだろうか
二、頭中将と夕顔との間にできた娘玉鬘のこと。「尋木」五六頁にある「あはれはかけよ撫子の露」の歌にちなんでこう呼ぶ

三、高麗楽に用いる横笛で、歌口のほかに六つ孔がある

もなるのでした。「思いも寄らぬいたずらをするのですね」と、お憎みになりながら、

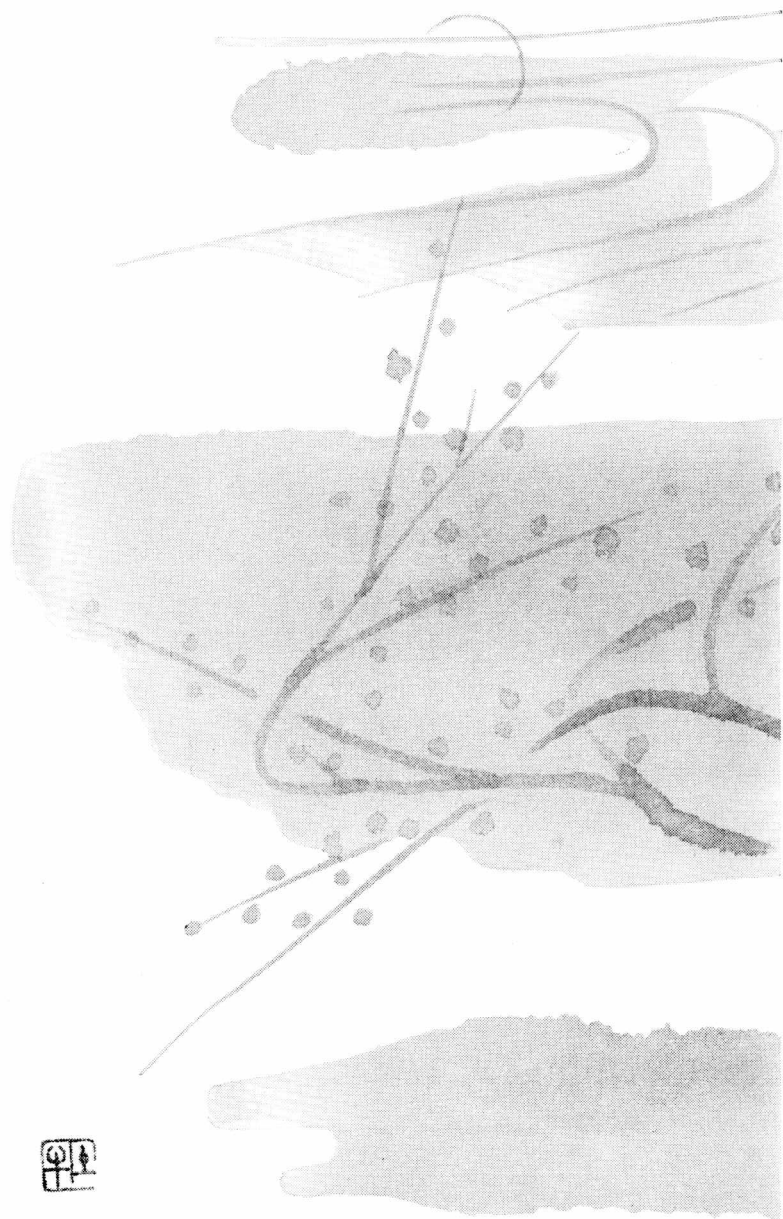
里わかぬ影をば見れどゆく月の

いるさの山を誰か尋ぬる

「こんな具合におあとを尾けて歩きましたら、どうされますか」と中将は言われます。「本当のこのを言いますと、こういうことはお供次第で上首尾に行くものなのです。もうこれからは私をお連れになることですな。お忍び歩きは間違いが起りやすいのですから」と、押し返して忠告を申し上げます。君はたびたびこういうところを見つけられてばかりいらっしやいますのを、口惜しく思いになるのですが、あの撫子の行くえだけは中将も尋ね出せずにいますので、それを御自分の大きな手柄として、心ひそかに誇っていらっしやるのでした。

お互いに、お通いになる所があるのでしたが、今さら照れ臭くて、もう別々にはおなりになれず、一つ車にお乗りになって、月が面白い具合に雲に隠れている道のほどを、笛を吹き合わせながら大殿へお越しになります。先払いの声も立てさせられずに、忍んで中へおはいりなされて、人の見えない廊でおん直衣を取り寄せてお召し換えになつてから、何喰わぬ顔で、たつた今退出したという風に、笛などを弄んでおいでになりますと、例のように大臣がお聞き逃しにならず、狛笛をお取り出しになりました。たいそう上手でいらっしやいますので、非常に見事にお吹きになります。





イ、ここに仕えている
女房の名

ロ、葵の上の母

御簾のうちでもその方面に嗜みのある女房たちに、お琴どもを取り寄せてお弾かせになります。中務の君は、もっぱら琵琶を弾くのですけれども、頭中将が思いを寄せているのを袖にして、ほんのたまさかな君のお情の有難さをよう拒みかねていることが、自然知れ渡っていますところから、大宮などもけしからぬことだと思いいなっていますので、何となく具合が悪い気がして、心も重く、あじきなさそうに物に倚りかかっているのです。これきりお姿を拝めないような遠い所へ行ってしまうのも、さすがに心細いので、思い悩んでいる様子です。君たちはまた、さっきの琴の音を思い出し給うて、あの哀れげなすまいの様も一風変っていて面白いなどと思いいなるにつけ、仮に、たいそう美しい可愛い人が、ああいふ所に年月を重ねて住んでいるとして、もし逢いそめて非常に氣に入るようであつたら、さぞ自分などは我を忘れて取り上氣せるであらう、そうしたらまた世間の人々がどんなに騒ぎ出すであらうなどと、中将はそんなことをさえ空想するのです。源氏の君がああいう風に身を入れてお通いになるのでは、どうせあのままでは済むまいなどと、妬ましいような、氣がかりなような心持になるのです。

そのち源氏の君からも頭の君からも、文などお遣わしになったでしょうが、どちらにも御返事がありません。心もとなくもあり、じれったくもなつて、あれではあまり愛想がなさ過ぎる、ああいう佗び住居をする人は、はかない草木や空の景色などを見てさえ哀れを知り顔にふるまうところ

に、ゆかしい心根の推しはかられる折々があつてもいいのではないか、重々しい身分だからといって、こうまで引つ込み思案なのは面白くないことだと、中將はことにやきもきするのでした。例のごとく隠し立てをなさらぬ間柄のことですから、「あなたの方へは何とか返事があつたでしょうか。実は私もちよつとほのめかしてみましたのですけれど、妙な具合で、それきりになつてゐるのです」とお訴えになりますと、されば、やつぱり言い寄つたのだなど、おかしくて、「さあ、別に返事を見ようとも思つていないせいか、見たような氣もしないけれど」とお答えになりますので、それでは自分は嫌われたのだと、中將は恨めしく思います。君はもともとそうまで深くは心にかけておられなかつたのですし、ましてすげない様子なので、興ざめていらしたのですが、こんなに中將が附け廻してゐるようでは、結局言葉数を費して上手に口説きたる方へ靡くであらう、その時になつてしたり顔に、前の男を見放してやつたという風を見せられたら、あまりいい氣持はしないであらうと思ひになりますので、命婦を召して真面目に御相談なさるのでした。「あの姫君がへんによそよそしく、逃げるようにしておられるらしいのが氣に喰わない。きつと私を浮氣者のように疑つておいでなのであらう。こう見えても変りやすい心は持つていないのに、女の方に末長く頼らうという辛抱がなくて、案外なことにばかりなるものだから、自然私が悪いことにもされてしまふ。のんびりとしたところがあつて、よけいなおせっかいをしたり、不足を言つたりする親兄弟が